

歴史（目黒川）

目黒川の河口付近では古くは「品川」（しながわ）といい、湾岸開発が進む以前は河口付近で流れが湾曲していたため緩やかであったため品川湊として使われ、品の行き交っていた川であり、これが地名「品川」の起こりとされています。江戸時代の絵図などでは、その上流の下目黒付近では「こりとり川」と記され、「こりとり」は「垢離取り」の意味で、この川で身を清めてから目黒不動尊（瀧泉寺）に詣でたとされています。

世田谷区三宿の東仲橋付近で北沢川と烏山川が合流して目黒川となり、品川区の天王洲アイランド駅付近で東京湾に注いでいます。起点（北沢川と烏山川の合流点）から国道246号の大橋までの600m強の区間は暗渠化され、それと併せて地表部分には人工のせせらぎの緑道（目黒川緑道）が整備され、カルガモやコイ、ザリガニなど様々な生物が住みついています。

平成7年（1995年）以降、「清流復活事業」として、目黒川を流れる水の大部分は新宿区の東京都落合水再生センターで下水を高度処理したものを導いています。これにより水質が改善されてスミウキゴリなど魚類が増え、東京湾からマハゼやアユ、ボラが遡上するようになりました。最近では、目黒から五反田、大崎にかけて桜並木が整備され、テレビでも放映されるなどサクラの時期には多くの見物客で賑わう東京の花見スポットとなりました。

